

火祭り

左義長（さぎちょう、三毬杖）とは、小正月に行われる火祭りの行事。地方によって呼び方が異なる。日本全国で広く見られる習俗である。

1月14日の夜または1月15日の朝に、刈り取り跡の残る田などに長い竹を3、4本組んで立て、そこにその年飾った門松や注連飾り、書き初めで書いた物を持ち寄って焼く。その火で焼いた餅（三色団子、ヤマボウシの枝に刺した団子等地域によって違いがある）を食べる、また、注連飾りなどの灰を持ち帰り自宅の周囲にまくとその年の病を除くと言われている。また、書き初めを焼いた時に炎が高く上がると字が上達すると言われている。道祖神の祭りと言われる地域が多い。

『弁内侍日記』建長3年1月16日（1251年2月8日）、『徒然草』にみえるから、鎌倉時代にはおこなわれていたらしい。起源は諸説あるが、平安時代の宮中行事「左義長」を起源とする説が有力

地域により呼び名は異なる

どんど焼きとは、お正月飾りの門松やしめ縄それに書き初めなどを、火にくべて焼き払う日本の伝統行事です。

当地区での風習を記録する

正月の終わりの節目も兼ねて、五穀豊穰・家内安全・無病息災 etc.を祈り開催されていた。

トンド焼は1月13日 or 14日の夜に「とんど講」とも云う講・グループが5～8戸単位で構成されていた。（どの様に別け編成されたかは不明）

1980(S55)年頃から1講減りだし段々解体されていった。現在は無し。

ゆえに2008(H20)に部落地区行事として立ち上げられた。今年で第8回目。講時代には、トンドの火を明かりにして各戸持ち帰り、玄関口に挿すと同時に、その炭火でローソクに点火してお灯明として仏壇や神棚に置いた。

マタ、お互いを買うテンカ・・買うテンカと作ってきた「ヘソ団子」をやり取りして味見したが、1個は残して自宅の神棚に飾っておいた。雷鳴が鳴ると改めて焼き直して家族皆で頂いた。

当夜は、自宅で善哉・細長く切って炊いたコンニャクが準備されていて家族で頂く習慣・風習もあった。現在では何処まで引き継がれていることは分からない。しかし、地区挙げての火祭りトンドが定着しつつある今、何とか古き良き慣習が伝統的な行事として引き継がれていくことを強く望む。